

腹腔鏡下ヘルニア修復術

腹腔鏡手術は低侵襲性と整容性に優れた術式でさまざまな領域に取り入れられています。当院では2015年から腹腔鏡下ヘルニア修復術（腹腔内到達法 TAPP 法）を導入しています。

臍とお腹の左右に3か所の孔（あな）を開けてカメラと棒状の器械（鉗子）を挿入し、炭酸ガスでお腹を膨らませて中の映像をテレビモニターで見ながら手術する方法です。腹腔内からヘルニアを直接観察するため診断が容易で、体表面からは診断が困難な合併する複数のヘルニアや反対側のヘルニアでも診断が可能です。このような複雑なヘルニアもすべて同じ傷で手術が可能です。

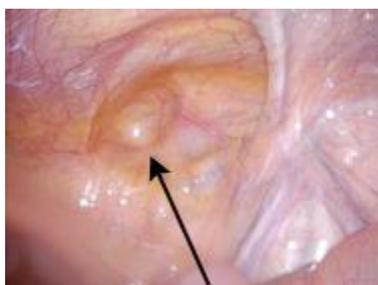
腹腔鏡を用いてヘルニアの穴を確認して、腹膜と筋肉の間、腹膜の外側にポリプロピレン製の補強材、メッシュを固定します。

腹腔鏡手術では現在ヘルニアを生じている穴以外にもヘルニアになりやすい弱い部分をすべて1枚のメッシュでしっかりと覆うことができます。

また傷が小さいので術後の痛みが少なく、美容的な点が最大の長所です。

ただし腹腔鏡手術には全身麻酔が必要です。何らかの理由で全身麻酔が困難な方は適応外です。入院期間は原則3泊4日です。

自分のヘルニアについて腹腔鏡手術の適応があるか担当医とよくご相談ください。



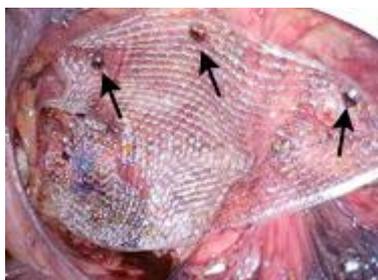
おなかの中から見た、
単径ヘルニア



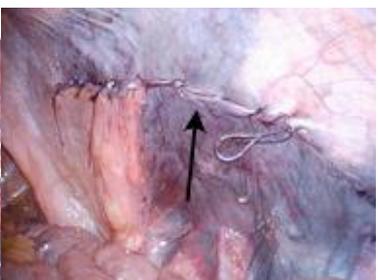
腹膜を切開し、
単径部を露出します。



3Dメッシュ・シート
修復に使用する



メッシュ・シートを広げ、
タッカーで固定します。



腹膜を吸収糸で閉鎖します。